光葉（こうよう）

～真の強さ求めて～

作　藤田　久雄

登場人物

ライド	ライオン（誇り高きボスの子供）と（幼獣）
ボス	ライオン（群れのボスでライドの父）
母	ライオン（ライドの母親）
雌①	ライオン（群れの仲間）
雌②	ライオン（群れの仲間）
カメリア	ライオン（ライドの恋人？）森ではステイトと名乗る。
クロ	ハイエナ
ブチ	ハイエナ
ミハエル	オオカミ
エルーク	ヘラジカ（長の息子）と（幼獣）
鹿①	シカ（長の友人）
鹿②	シカ（長の友人）
鹿③	シカ
草食④	
草食⑤	
草食⑥	
草食⑦	
草食⑧	

草食⑨
草食⑩
草食⑪
フク　フクロウ
ピー　スズメ
チク　スズメ
タン　オウム
パー　スズメ
テク　スズメ
トン　オウム
ゲンチャン　ヒト（紙芝居屋さん）
子供①　ヒト
子供②　ヒト
子供③　ヒト
子供④　ヒト
子供⑤　ヒト
子供⑥　ヒト
子供⑦　ヒト
爺や　ヒト

序章

舞台上では一人の紙芝居屋のゲンチャンが準備をしている。

そこへ元気いっぱいの子供達が集まって来て挨拶をする。

子供①　おじさんお菓子ちょうだい！

ゲンチャン　はいはい（袋詰めのお菓子を渡す）一つ百円ね。

子供①　はい、百円（お金を渡す）。

子供②　あたしも一つちょうだい！

ゲンチャン　はいはい、一つ百円だよ。

子供③　私もお菓子くださーい。

子供④　あっわたしも！

ゲンチャン　はいはい一つ百円だよ。

子供⑤　オレも菓子くれーい（横取りする）へへーん。

子供④　あっそれわたしのお菓子！

ゲンチャン　これこれぇ、順番だよ順番。

子供③　お金払ってからでしょっ（取り戻そうとする）ちゃんとお金払いなさいよぉ。

子供④　もしかしてお金持ってないの？

子供達は「えっお金持ってないの？」「百円もってないの？」など
それぞれが口にする。

子供⑤　バ、バカ！　百円くらい持ってるわっ、誰もカネ払わねぇとか言ってねぇだろ！（ポケットからお金を出して放り投げる）ほれよっ…、ほんとカネカネうるせぇなぁ。

子供③　（お金をキャッチ）ちょっと投げないでよっ、もおっ。

子供④　お金を粗末にしたら、お金に嫌われるよ。

子供⑤　はぁ？　なにそれ…。

ゲンチャン　ほらほら、みんな仲良くしよーね。

子供⑥　おじさん、僕にも、お菓子をください。

ゲンチャン　はいはい、一つ百円だよ。

子供⑥　僕、小銭を持ってないんで、カードで（クレジットカードを出す）。

ゲンチャン　…困ったねぇ。ほら見ての通り、うちはカードは使えないんだよ。

子供⑥　そうなんだぁ。（カードを仕舞いスマホを出す）じゃあペイペイで。

ゲンチャン　いやぁ、それもやってないんだよ。うちは現金だけなもんでねぇ、すまんなぁ…。

子供⑥　現金か…（舞台袖に向かいながら）爺や、爺や。

舞台袖からスーツ姿の老人が現れる。

爺や　はいはいお坊ちゃま、何で御座いましょう？

子供⑥　現金持ってる？

爺や　はい御座いますよ（財布からお札を出し）こちらでよろしゅう御座いますか？　お坊ちゃま。

子供⑥　うん、ありがとう。さがっていいよ爺や。

爺や　はい、かしこまりました、お坊ちゃま（去る）。

子供⑥　（現金を持って）はいおじさん、これで。

ゲンチャン　あ、ああ…（お金を受け取り）毎度ぅ（釣銭を数えるが足りない）。

子供⑥　おじさん、どうかしたの？

ゲンチャン　いやぁちょっと、お釣りが足りなくてねぇ…。

子供⑥　そうなの、じゃあいいよ、今あるだけで。

ゲンチャン　あいや、でもそう言うわけにわぁ…。

子供⑥　大丈夫だよ、僕のうちお金持ちだから。

ゲンチャン　いやぁ、そうは言ってもなぁ…。

子供⑥　ほんと気にしないでおじさん。じゃあお菓子一つもらうよ。

ゲンチャン　お、おう。じゃあこれ、はいお釣り（お金を渡す）。

子供⑥　どうも。

ゲンチャン　あとほれ、もっとお菓子持って行きな（お菓子を渡す）。

子供⑥　ありがとう、おじさん。

ゲンチャン　いや…、こちらこそ。

子供達はそれぞれ楽しそうにお菓子を食べている。

ゲンチャン　よーし、それじゃあ皆、お菓子は行き届いたかな。

子供達は返事をする。

一人だけ端っこで俯いている。

ゲンチャン　ん⁉　おいっ君？

子供達もゲンチャンの声に反応する。

その子はチラリと皆の方を見るが、また下を向く。

ゲンチャン　こっちへおいで、いや君じゃないよ、君だよ君（その

子供のところへ歩み寄り）どうした、ん？　お菓子はもう食べたのかね？

子供⑦　（頭を横に振る）

ゲンチャン　…なんだ、まだお菓子を貰ってないのか。ほらこっちへおいで、みんなと一緒にお菓子を食べよう。

子供⑦　（俯いたまま動かない）

ゲンチャン　ん、なんだ具合でも悪いのか？

子供⑦　（頭を横に振る）

ゲンチャン　じゃああれか、お菓子はあまり好きじゃないのか？まあみんなが皆、お菓子が好きってもんでもないしな。

子供⑦　（俯いたまま黙っている）

ゲンチャン　…黙ってちゃあ分からんだろう、ん。どうした？　言ってごらん。

子供⑦　…わたし、お金、もってないから…。

ゲンチャン　お金？

子供⑦　お金ないから、お菓子は買えない。

ゲンチャン　ああ、そう言うことか…。ちょっと待ってな（自転車へお菓子を取りに戻る）。

子供④　その子、いつもお金は持ち歩るかない様にしてるって。

子供①　へーそうなんだ。

子供③　お母さんにお小遣い貰えないの？　わかった、無駄遣いしちゃうからでしょう？

子供②　あっ、そう言えばうちのお父さんが言ってたよ。お母さんを怒らせるとお小遣い貰えなくなるから、お母さんの言うことはちゃんと聞きなさいって。

子供①　へーそうなんだ。

子供⑤　（笑いながら）でもさぁ、たった百円じゃんこのお菓子。

子供④　でもあんたさぁ、その百円をケチってたじゃん。

子供③　ほんとほんと。

子供⑤　バ、バカ言うな、ケチってねぇし。このお菓子代だってちゃんと払っただろう！

子供③　そんなの当たり前でしょ。

子供④　なんでお金払っただけで威張ってんのよ！

子供⑤　別に威張ってねぇし。

子供⑥が⑦の所へ行き。

子供⑥　このお菓子もらってくれない？

子供⑦　（顔を上げる）え？

子供⑥　僕こんなに沢山食べられないし、それにこのお菓子、

誰かが食べてくれないと無駄にしちゃうからさ。

子供⑦　でも…。

子供⑤　じゃあオレが食べてあげるよ！

子供④　ダメ！　あんたに言ってないでしょ！

子供③　ほーんと、食意地が張ってるんだからっ。

子供⑥　（⑦の前にお菓子を渡す）はい。早くあっちでおじさんの物語を聞こう。

子供⑦　うん。

一部始終を見守っていたゲンチャン。

子供達はゲンチャンの周りに座り（今日はどんな話かな）（わたしは初めてお話聞く）など喋っている。

ゲンチャン　（子供達を見渡し）オッホン！　それではみんな、物語を聞く準備は出来たかな？

子供達　はーい！

ゲンチャン　（紙芝居を見せながら）うん。これから話す物語はまだどこにも話した事のない物語。題名は「こうよう」光る葉っぱと書いて「光葉」。この物語ではライオンをはじめ、鹿や鳥などいろんな動物達が出てきて、この

厳しい世の中をどう生き抜くか、そんな物語です。ここで一つみんなに質問、動物達はどうやって生きているかな？

子供達は少し考えて一人が手を挙げる。

子供　はい。餌を食べて生きてる！

ゲンチャン　うんそうだね人間と同様、生きる為には食べないとねえ。じゃあ動物は何が何を食べるのかな？

子供　そんなの簡単じゃん、鹿は草を食べるっ！

子供　ライオンは肉食動物だから肉を食べる！

子供　僕ライオンが好き、だって一番強いじゃん！

子供　でもライオンに食べられちゃう子たちが可哀そう。

子供　そんなこと言ったって仕方ないじゃん。

ゲンチャン　うーん、食べられちゃう動物は可哀そうかもしれないけど、ライオンも命を懸けて生きているんだよ。そんなライオンも必要以上の狩りはしないから無駄になる命はないんだ。自然界というものはそうやってできている。ここに居る皆は命を粗末にしていないかい？出されたご飯は残さず責任をもって食べてるかな？

子供達　はーい！

ゲンチャン　うん、よろしい。

自然の音が聞こえる中

ゲンチャン　さてさて物語に戻りますが、弱肉強食が当たり前だった自然界に変革の風が今まさに吹こうとしています！

自然の音は高まる

音楽が流れる

そこに居た人間達と入れ代わりに動物達が現れ、辺りは自然に囲まれている。

景1

物語の中。

夜明けまであと数時間。

舞台中央奥には巨樹があり、近くには水場がある。

草食動物達が、草を食べたり水を飲んだり会話をしている。

そこへ一頭の肉食動物が忍び寄る。

一瞬の静寂。
肉食動物は狙いを定めて襲い掛かる。
草食動物達は一斉に逃げ回る。
陰に潜んでいた肉食動物達も飛び出す。
それぞれ動物達は舞台上を右往左往して入り乱れる。
空になった舞台に肉食動物が草食動物を捕らえて現れる。

雌①　こいつ往生際の悪い奴だったわね。
雌②　ほんと、なかなかしぶとい奴だったわ。
雌①　馬鹿よね、子を庇って自分が逃げ遅れるんだから。
雌②　全くよね。しかし追われれば逃げ出さずにはいられない、それがこいつら草食動物達の性なのさ。
雌①　性だろうが何だろうが、うちらライオンが弱い者を食う。これが世の中の掟、自然の摂理ってもんさ。
雌②　今日はそれがこの鹿だっただけのこと。
雌①　そう言うこと。

顔を見合わせて笑う。

雌①　さあ、頂くわよ。

雌②　（鹿を見て）ねえほら見て。

雌①　なに？

雌②　この鹿の眼。

雌①　眼？

雌②　まだ光が残ってるでしょ？

雌①　ほんとだ、でも少しづつ光が弱くなっていくわ。

雌②　（身震いをして）ああ、たまらないわ。

雌①　え、なにが？

雌②　このキラキラした石の様な眼から少しづつ光が失われていくのを見ていると、あたしは感じるのよ。

雌①　感じる？　なにを？

雌②　生命（いのち）を…。

雌①　生命（いのち）を、感じる？

雌②　ええそうよ、そしてその消えゆく生命（いのち）の灯火見ていたら無性に腹の虫が鳴くのよぉ。

雌①　（大笑い）要するに狩った獲物が食べたくてたまらないってことでしょ。

雌②　まあ、そうね。

雌①　結局、あたし達もあたし達の性には逆らえないってこ

とよ…、あら？（鹿の眼を見て）こいつの眼なんだか笑ってるようにも見えない？　今から食われるっていうのに少し不気味ね。

二匹は鹿をじっくり見た後、顔を見合わせて笑う。

そして遠目を見て…。

雌①　あ、ボスよ。

雌②　えっ、ついてないわね。

そこへライオンのボスが悠々とやって来る。

雌①②は餌を置いてそこから離れる。

雌②　無駄話なんかしないでさっさと食べておけばよかったわね。

雌①　ホントよ、そもそもあんたがあの鹿の眼を見て、光がどうのこうの言うからでしょう。

雌②　だってあいつの眼、まるでキラキラ光る石みたいだったんだもん。

雌①　大体、石が光ろうが何しようが私達の腹は満たされないでしょう。

雌②　うん（置いてきた餌を眺めて）あーあ、久々の大物だったのに…。

雌①　ホントに…、もしかするとあの鹿も群れの中のボスだったのかもしれないわね（去る）。

ライオンのボスは餌を食べている。

そこにヘラ鹿の幼獣（エルーク）が息を切らしてやって来る。

そしてライオンの母親と子（ライド）が挟み撃ちにする。

エルーク（幼獣）　（息を切らしている）はぁ、はぁ、はぁ～。

母　さあ、今よっ！

ライド（幼獣）　わかってるよっ、俺だけでやれるから母さんは余計なことしないで！

逃げ惑うエルーク、追いかけるライド、それを見守る母。

そしてエルークは食べられている鹿を見て立ち止まると…。

エルーク　お父ちゃーんっ！

ボス　…。

ライド　（一瞬の隙をついて飛び掛かる）よし、大人しくしろっ！

エルーク　いやぁーっ！

ライド　くそっ暴れるな、このぉっ。

なおも暴れるエルーク、それを必死に抑え込むライド。

ボス　…目の前でうるせぇなぁ、落ち着いて餌も食えねぇじゃねぇか。お前はそんな弱っちぃ奴も仕留められないのか？

ライド　くそっ、おとなしくしろっ。

エルーク　うぎゃー、父ちゃん父ちゃん、やだよー。

ライド　黙れっ、こいつぅ。

エルーク　いやぁー、いやぁー。

ボス　この鹿の子かぁ？　親子そろって運が悪い奴らだ。

母　ほらっ喉を絞めるのよ！

ライド　分かってるよ、今やろうとしてるんだけど、こいつが暴れるから上手く決まらないんだよっ、このぉ。

エルーク　あぁー、どぉぢゃーん！

ライド　黙れって言ってんだろう！

泣き叫ぶエルーク。

ボスが立ち上がり、二頭に近づき。

ボス　ああーうるせぇー！

二頭まとめてぶっ飛ばす。

ライドとエルークは左右へ吹っ飛ぶ。

エルーク　うへっ～。

ライド　いてっ～、何するんだよぉっ。

母　ちょっと。

ボス　ふんっ情けねぇ。お前は本当に俺の血を引いてんのかぁ？　こんな子鹿一匹に苦戦してんじゃねぇよ。

ライド　…。

母　あんた、そんな事言ったって仕方ないでしょう。まだこの子も狩りになれてないんだから。

ボス　そんな甘い事をいつまでも言ってる様じゃ、この自然界で生きていけねぇって言ってんだよ。

エルーク　父ちゃーん！（隙をついて逃げる）

ライド　…あっ。

ボス　お前みたいな弱っちい奴は俺の群れにはいらん、さっさと出ていけ。

母　ちょっとあんた、まだこの子は…

ボス　そうやっていつまでも母親に寄生して生きるくらいなら、ライオン辞めた方がましだな。

ライド　…。

ボス　それとも、こんなこと言われて少しでも悔しいとおもうなら、百獣の王の名にふさわしく、誰よりも強くなって俺や周りの奴を見返してみろ。どちらにしても今は情けないお前の顔なんか見たくないわっ。

ボス去ると食べかけの餌にハイエナ達が群がる。

ライド　あいつら…、おいお前らどっか行けっ、それは俺らのだぞ。

ハイエナ達は容赦なく餌を貪る。

母　もうあーなってしまったら私達にも手が付けられないわ。下手に手出しすると流石の私達もただでは済まないわ。

ハイエナ達は餌を持ち去る。

ライド　…ちくしょう！

ライドは遠くを眺めて少し考える。

ライド　俺、行くよ。

母　行くって何処に？

ライド　百獣の王の名にふさわしく誰よりも強くなって、親父だけじゃなく、この世の中の奴らみんなを見返してやる。

母　何よりも気高く、そして誰よりも誇り高い。そうやって生きる事しかできない、それが私たち種族の性なのかしらね…。

ライド　母さん、俺もう行くよ。

母　うん、気をつけて。

ライド　それじゃ（歩き出す）。

母　…ちょっと待って。

ライド　なに？

母　…ライド。

ライド　え？

母　ライド。

ライド　ライド？

母　そう、なまえよ、あんたの名前。

ライド　俺の、なまえ？

母　私があんたに最後にしてあげられる事。

ライド　母さんが最後に、僕にしてあげられること？

母　そう、あんたに名前があれば、遠く離れていても、あんたが生きている限り私はあんたを知る事ができる。

ライド　僕を、知る事ができる…。

母　そうよ、だからあんたの名前がこの世の中に轟く様に強く、そして自分を信じて生きなさい。わかったわね、ライド。

ライド　うん、わかった。…それじゃあ、母さんも元気で。

母　うん。

二匹は舞台の上下へ去る。

ところ変わって、とある森。

命からがら逃げて来たエルーク。

エルーク　（息を切らし後ろを振り返り）父ちゃん…。

そこへ二頭の鹿がやってくる。

鹿①　ひでぇーよなぁお前、俺を置いて行くんだもん。

鹿②　なに言ってんだよ、俺だって必死なんだから仕方ねぇだろう。

鹿①　今度からなるべく一緒にいてくれよ、なっ。その方がお互い助かりやすいし。

鹿②　（エルークに気がつき）おお坊ちゃん、無事だったのかぁ？　てっきり捕まったのかと思ったよ、なぁ。

鹿①　うん、坊ちゃんがライオンの親子に追われてるって聞いてたから、正直こりゃ駄目かもなって思ってたんだが、無事でなにより。

鹿②　しかしよく逃げ切れたなぁ、さすが長の息子だ。

鹿①　本当だよ、こりゃもう子ども扱いできねぇなぁ、もう立派な大人の仲間入りだな（笑う）。

エルーク　僕は運がいいだけだよ…。だって一度は捕まったんだから。

鹿①　え、そうなのか？

鹿②　じゃあ何でここに戻って来られたんだよ？

エルーク　それは…。

鹿①　あっ、わかった。「助けてください、今食べるより、もっと大きく育って食べた方がお腹いっぱいになりますよ」とか何とか言ってお願いしたのか？

エルーク　そんなこと言ってない（鼻をすする）。

鹿①　ん？　泣いてんのか坊ちゃん、冗談だよ冗談。

鹿②　お前悪いぞぉ。それにこの前「助けてください後生だからお願いします。俺を食ってもあまり美味しくないですぜ」って命乞いしたのはお前だろ。

鹿①　あれれ、見てたの？　でもそれで命が助かるんなら儲けもんだろ？

鹿②　まあそらそうだ。死んじまったら元も子もないもんな。

鹿①　そうだよ、生きてなんぼだ。よーし拾った命、無駄にしねぇぞ。これからも思う存分に生きてやる、まずは腹ごしらえだ！

鹿②　そうだな。坊ちゃんも一緒に栄養満点の葉っぱでも食べに行こうぜ。

エルーク　うん、あとから行く。

鹿②　そうか…。まぁ坊ちゃんも少し走りくたびれているみたいだし、ちょっと休んでから来ればいいよ。心配しなくても此処いらの葉っぱは沢山あるから。

鹿①　そうそう。よく休んでよく食べる、これが元気に生きる秘訣だな。

二頭は去りつつ

鹿①　それにしても長はいい餌場を見つけてくれたよなぁ、ありがてぇ（去る）。

エルーク　…父ちゃんっ！（大きくため息を吐く）

風が吹く。

一枚の葉っぱがエルークの足元に飛んでくる。エルークはそれを何気なく拾う。

…どこから声が聞こえてくる。

声　生きろ、エルーク。

辺りを見回すエルーク。

声　下を向くな、前を見ろ。生きてさえいれば、きっとお前の歩む道が見えてくる。生きてさえいれば、きっと光は指す、おまえの道しるべとなって…。さあ自分を信じて一歩を踏み出すんだエルーク。

声は森に響く。
エルークは声の主を探すが見当たらない。
そして手にした葉っぱを見て月明りに葉っぱを掲げる。
舞台奥が明るくなり、まるで葉っぱが光っているかの様になる。
そして、葉っぱを持ったエルークのシルエットが浮かびあがり、夜明けと共に暗転。
幕間。
ゲンチャンと子供達。

子供　ねぇねぇ、おじさんおじさん。あの鹿の子供がエルークって言う名前なんでしょう？

子供　エルークはお父さんが居なくなって可哀そう。

ゲンチャン　可哀そうかもしれないけど、この世の中泣いてばかりでは生きられないんだよ。エルークも厳しい現実を受け止め、強く生きながら大人になっていくんだよ。

子供　ねぇおじさん、ライオンの子供はどうなったの？

ゲンチャン　ライドかい？　ライドもまた強くなる為に一人立ちしたのさ。

子供　ねぇおじさん、何で葉っぱが光るの？　あの光る葉っぱって何なの？

ゲンチャン　光る葉っぱかい…。それはこれからの展開で分かってくるから、しっかりこの物語を聞いておくれ。

子供達　はーい！

ゲンチャン　それでは、先程から数か月が経った時のこと…。

景2

成獣になったライド。

数日、餌にありつけず痩せている。

疲れて木陰にへたり込む。

ライド　ああーくそぉー、腹減ったー。…まさか俺はこのまま飢え死にするなんてことに…。いやそんな事あるもんか、この俺に限ってそんな事ありえない。誰よりも強いこのライド様がこんな所で…。そうだこれは試練だ、強い俺がもっと強くなる為の試練に違いない。きっと軟弱な奴なら此処で死ぬんだろう、そしてその屍を意地汚く卑しい奴らに食われるんだろうが俺はそうはな

らんぞ。こんな所でくたばって堪るか、何がなんでも生きてやる。…ああそれにしても腹減ったなぁ、少し横になるかぁ。

寝転ぶライド。

それを覗き込むフクロウ（フク）。

ライド　（フクロウに気がつき驚く）うわっ。

フク　（すまして挨拶をする）やあ。

ライド　…そこで何をしてる？

フク　何も。

ライド　何も、嘘つけ俺は騙されないぞ。お前はフクロウ、猛禽類のフクロウじゃねぇか！

フク　ほっほっほう、そうじゃよ、わしゃフクロウ。だからなんじゃと言うんじゃい？

ライド　とぼけるな、俺の肉を狙って俺が此処でくたばるのを待ってんだろう、くっそぉせこい奴め。

フク　ほーう？

ライド　俺はそう簡単にはくたばらないからな、フクロウのお前ごとき食われてたまるか、逆に俺がお前をくってやる覚悟しろ。

フク　（あくびをする）。

ライド　馬鹿にしやがって。

ライドはフクに襲い掛かる。

フクはひらりと身をかわす。

ライドは何度も襲い掛かるがフクは軽々と身をかわす。

フク　無駄じゃよ無駄…。

ライド　（息を切らし）まだだぁ。

フク　懲りんのぉ。

ライド　くそぉ、弱っちいくせに生意気な。

フク　馬鹿もん、弱いのはお前さんの頭じゃろうが。わしは空を飛べるんじゃぞ。

ライド　それが何だって言うんだよ、俺は百の獣の中で最も強い、ライオンのライド様だぞ！

フク　ん、ライド？　それは何じゃ？

ライド　俺の名前だ！

フク　ほーう、ライドとな。

ライド　そうだライドだ、よーく覚えておけ。と言ってもお前はこれから俺に食われるんだから、覚えても意味はな

いがな。

フク　ほっほっほう、わしはお前さんなんかに食われんよ。むしろこのまま無駄に動き回って力尽きるのは、お前さんだよ。ライドとやらそれが分からん様じゃ、どんなに腕力があってもこの世は渡り歩けん、つまりお前さんは弱者じゃよ。

ライド　俺が弱者だって？

フク　そうだ。いいか本当に強くありたいのなら、まずは自分の置かれた状況をよく理解し、そして賢く生きる事じゃな。そうすればどんな苦難があったとしても、絶望する事なくきっと道は開かれる。ただ腕力だけに物を言わせている様じゃ、これからの世の中は渡り歩けん。真の弱肉強食と言うやつはそう言うもんじゃ。

ライド　ペラペラペラペラ知った様な口を利きやがって。

フク　あ、それと喋りついでにもう一つ。わしの名前はフクちゃん、フクロウのフクちゃんじゃ、よろしく。

ライド　けっ。

風が吹く。

ライドは風上の方を向いて鼻を利かせる。

フク　何じゃライド、どうした？
ライド　匂う、匂うぞ、こっちだな…。

ライドは忍び足で風上の方へ去る。
そこへ鳥達がやって来る。

ピー　まずいわ。
チク　まずいわね。
パー　やばくね？
テク　やばいよね！
ピー　あんな所で一人。
チク　あんな所に一人。
パー　食べるのに夢中の。
テク　食いしん坊〜‼
ピー・チク　うるさいっ！
テク　…（反省）。
ピー　危険ね。
チク　危険よ。
パー　やばいねっ。
テク　やばいよっ。
ピー　早く群れに戻らなきゃ。

チク　早く群れに戻らないと。
パー　さっきのライオンに。
テク　食べられる〜‼
ピー・チク　うるさいっ！
テク　…（反省）。
ピー　もしかして。
チク　もしかすると。
パー　もうだめかも。
テク　だめかもねっ。
ピー　でもわたしには。
チク　わたしたちには。
パー　せきにんないもんね。
テク　（興奮気味に）せきにんっ（何とか抑え）ないもんね。
ピー・チク　（顔を見合わせて頷く）。
ピー　まあ本人の問題だし。
チク　本人の問題よね。
パー　そうそう、そう言うこと。
テク　（感情が抑えきれず）ギャー！
ピー・チク　うるさいっ！
テク　…（反省）。

ピー　いきましょう。
チク　いきましょう。
パー　いきますか。
テク　どこに？　ねぇねぇどこに～？

鳥達は行こうとしてフクに気がつく。

ピー　あら。
チク　あらあら。
パー　どうもー。
テク　どちら様？
フク　やあやあ。
ピー　うふ、それじゃあ、ごきげんよう。
チク　うふふ、ごきげんよう。
パー　さようなら～。
テク　ねぇ、あのじじぃ誰？

鳥達は噂話をしながら飛び立つ。

フク　飽きもせずよく囀るねぇ（飛び立つ）。

ところ変わってとある広場。

日も暮れかけた頃。

一頭の鹿③が食べるのに夢中になっている。

鹿③　はぁ～食った食った（辺りを見回す）。あれ、誰もいない。何だよみんな俺を置いて行きやがって、ひっでぇーなぁ。行くなら行くで一声かけてくれりゃあいいのに（ゲップ）。

風が吹く。

鹿③　（身震いをして）さぁ、日が落ちる前に行くとするか。よいしょっと、あぁ食べ過ぎたかなぁ、少し体が重いや、ふぅ～。

ライドが現れる。

ライド　おっと、行かせねぇぞお。

鹿③　しまった⁉　くっそー、食べるのに夢中で気がつかなかった。

ライド　ふんっ間抜けな奴め。それにしてもよく肥えてやがる、ちょうど食べ時だなぁ。

鹿③　ちょちょ、ちょっと待ってくれ！

ライド　諦めろ、俺は甘くねぇぞ。

鹿③　そう言うなよ、なっ頼むっ。

ライド　俺は腹が減って死にそうなんだよ。

鹿③　お願いだから（泣きながら）たどむよぉ～、なっ後生だからだすけでくださいぃ～。

ライド　世の中そんなに甘くねぇんだよ。弱肉強食、この社会で生き抜く能力のねぇ奴がいくら吠えても、誰の耳にも届かねぇんだよっ！

鹿③　…ぐあぁー（逃げる）。

ライド　逃がすかっ（捕まえる）。

そこへライオンの若雌（カメリア）が現れる。

カメリア　ちょっと待った！

ライド　…なんだお前？

カメリア　そいつは私の獲物だよ。

ライド　ふざけるな。

カメリア　ふざけてるのはそっちの方でしょう、私がそいつを狙っている所に横から割って入ってきて。

ライド　そんなの知るかっ。

カメリア　知ろうが知るまいが、その獲物は渡してもらうよ。

ライド　雌ライオンのくせに生意気な。

鹿③　あっそうだっ、あんたらこれをやるから見逃してくれよっ。

懐から何枚かの葉っぱを出す。

ライド　何だそれ？

カメリア　葉っぱ？

鹿③　ただの葉っぱじゃない。これは光葉（こうよう）っていう葉っぱさ。

ライド　お前、死を目の前にして血迷ったか？　俺らは肉食だぞ、葉っぱなんか食わん。

鹿③　そんな事は分かってる。

カメリア　だったら葉っぱなんか…。

鹿③　違うんだっ、ちょっと聞いてくれっ。この葉っぱは俺達草食動物も食べないんだ。こいつは特別な価値がある葉っぱで、とても有難いもんなんだ。だからこの光葉を持っていれば、あんた達も安心して生きられる！

ライド　何を言ってるのかさっぱり分からん。

鹿③　兎に角これからは光葉がすべて、この光葉さえあれば思いのままに生きられる。

カメリア　その葉っぱがあれば思いのままに生きられる？

ライド　じゃあそいつで俺の腹も満たされるとでも言うのか？

鹿③　ああなる！　使い方次第で。

ライド　笑わせるなっ。

ライドは光葉を取り上げる。

ライド　こんなもんで腹が満たされるんなら苦労しねぇーよ。

それにお前、さっきこれさえあれば思いのままに生きられるっつったよなぁ。

鹿③　ああなるよ、なる！

ライド　なってねぇーじゃねぇか？

ライドは光葉を投げつける。

鹿③　ああ、俺の光葉がっ！（急いで拾い集める）

カメリア　こいつ、この期に及んでまだそんなもんに執着してやがる。惨めったらないねぇ。

鹿③　あんたらは何も分かってない、きっといつか後悔するぞ、気がついた時にはもう遅いからなっ。

カメリア　何言ってんだか、気がついてないのはそっちでしょっ、今から食われるってことを…。

鹿③　…くそっ（体当たりして逃げる）誰かっ！　誰か助け

てくれー。光葉をやるから誰か助けてくれっー！（去る）。

ライドとカメリアは後を追う。

幕間。

ゲンチャンと子供達。

ゲンチャン　こうしてライドとあの若い雌ライオンは行動を共にし、後に恋に落ちました。

子供①　ねぇねぇおじさん、恋に落ちるってどう言うこと？

子供②　そんな事も分からないの？　子供だなー。

子供①　それじゃあ（②）ちゃんは分かってるの？

子供②　当たり前じゃん。要するに、あの二匹のライオンは結ばれたって事でしょう？　ね、おじさん。

子供①　私は落ちるのは嫌だなぁ。

子供⑤　（興奮して）ねぇあのシカ食べられたの？　あのシカ食べられちゃったの？

子供④　あんた何で興奮してんの？

子供③　そんな事より、あの光葉って言う葉っぱは、ただの葉っぱじゃないの？

ゲンチャン　ん～、光葉とは一体なんなんだろうねぇ…。それはこ

れから少しづつ分かってくるからね。
さてさてお話に戻るよ、いいかな…。
ライドと若い雌ライオンは数か月の間、共に協力しお互いの腕力を活かし、この厳しい社会に立ち向かっておりました。しかし現実はそう甘くはありません。これまで順風満帆にいっていたライド達の生活にも暗雲が漂うのです…。

景3

それから数か月後、ある水場。
数頭の草食動物が憩いを楽しんでいる。
そこへ草食④が慌ただしくやって来る。

草食④　ちょっと、ちょっと、ちょっと、ちょっと、あんた達。
草食⑤　何だよ、何だよ、何だよっ！
草食⑥　騒がしいなぁ、水くらいゆっくり飲ませてくれよ。
草食④　呑気にくつろいでる場合じゃないみたいだよ。
草食⑤　そりゃどう言う事だい？
草食④　もうじき此処へやって来るらしいよぉ。

草食⑤　もうじきやって来るって、何がやって来るって言うんだい？

草食④　決まってんだろう、肉食のライオンがうちらを狙ってここに来るらしいんだよ。

草食⑥　来るらしいって、お前何でそんな事が分かるんだよ？

草食④　そんな事決まってんだろう、鳥達があっちこっちで囀ってるからだよ。

鳥（タンとトン）がやって来る。

草食④　信じられないなら、鳥達の囀りを自分の耳で直接聞いてみな。

皆は鳥達の囀りに耳を傾ける。

タン　どうやらかなりお腹を空かせてるみたい。

トン　どうもかなり腹ペコみたい。

タン　見つかるとマズイわね、きっと。

トン　見つかると美味しく食べられちゃうわね、きっと。

タン　（周りを見て）まぁ餌になりたけりゃ、此処に居ればいいけど。

トン　（周りを見て）まぁ自ら望んで餌になりたい者なんて、

いないでしょうけどね。

タン　この世は命あってのものだから。

トン　この世は命あってのものだもの。

タン　自ら命を捨てる者なんて。

トン　自ら命を捨てる者なんて。

タン・トン　この世に、いるはずがなーい！

草食⑤　もういいよ！　わかったから、なあ。

草食⑥　ああよーくわかった。

草食④　なあ、言った通りだろう。

草食⑦　なあ皆、私達はこれから森へ行ってエルーク様に会いに行くけど、あんた達も一緒に行くかい？

草食④　エルーク様に会いに行くって？　そりゃもちろん行く行く、行くに決まってんだろう！

皆は「行く行く」や「エルーク様に会いたい」など言って盛り上がり、森へ向かう。

草食④　（タンとトンに）お前達も来るだろう？

タン　もちろん行くわ。

トン　もちろん行くわよ。

草食④　また何かある時は、これで宜しく頼むよ（光葉を渡す）。

タン　（光葉を受け取り）ええ、わかったわ。

トン　（光葉を受け取り）ええ、まかせて。

草食④　それじゃあ、また森で（去る）。

鹿②　（戻って来て）おーい何してんだ、置いていくぞ！

鹿①　ちょっと待てって、用くらいゆっくりやらせてくれよ～。いつも置いて行くんだもんなぁ～。

鹿②　そうやっていつも逃げ遅れるんだもんなお前は。まぁ（光葉を手に）こいつさえあれば、もう肉食の奴らに不意をつかれる事はないから安心しな。

鹿①　そりゃそうだ（タンとトンに）ありがとなぁ～（去る）。

タンとトンも飛び立ち、誰も居なくなる。

そこへライドとカメリアがやって来る。

ライド　あれっ、また誰も居ない…。

カメリア　確かに獲物の匂いがしたのに…。

ライド　それは間違いない（辺りの匂いを嗅ぎ）ここらには草食動物達の匂いが、まだはっきりと残っている。

カメリア　風向きが変わって気づかれたのか…。

ライド　いやそんな事はない、俺達は常に奴らの風下に居たはず。

カメリア　それならなぜ誰も居ないの？　まるで私たちが此処へ来る事をあらかじめ知っているみたいに…。

ライド　俺達が此処へ来る事を知っている？

カメリア　ええそうよ、だってよく考えてみてよこの状況を。もう一度や二度じゃないのよ、こう都合よく何度も私達がやって来る気配を悟れる？

ライド　…俺の狩りの腕が鈍った？　いやそんな筈はない。子供の頃から今まで数えきれない程の狩りをしてきて、むしろ今の俺の狩りの腕は誰にも劣らない。若さに腕力それに加え経験も備えた今の俺はまさに百獣の王…。なのに何故だ、狩りどころか獲物の姿すら捉える事ができないなんて…。

辺りに鳥の声や水辺の音が虚しく響く。

カメリア　ねえライド、このままだと私達二人とも飢え死にしてしまうわ。だからそれを逃れるため私に考えがあるの。

ライド　考え？

カメリア　ここ数か月、私達はお互い助け合いながら狩りをして生きてきた。でも今のこの異常な状況の中、二人で一緒に闇雲に動くのはリスクがありすぎるわ。そこでこ

れからは二手に分かれて単独で狩りをするのよ。

ライド　二手に分かれて狩りをする…。

カメリア　そう、そうすれば獲物にありつく確率も単純に倍になる。

ライド　成程、その手があったか。そうすれば獲物を囲う範囲も広がり、いずれは二人で挟み撃ちってわけか…。

カメリア　不安？

ライド　バカな、望む所だ。よーしそうと決まればいっちょやってやるか！

カメリア　そう言うと思った（寂しげな表情）…。

ライド　ん、どうした？

カメリア　また会えるわよね？

ライド　会えるさ、きっと。

二人は身を寄せ合う。

ライド　（辺りの匂いを嗅ぐ）俺はこっちに行く。

カメリア　私、あなたの匂い、忘れない。

ライド　俺も忘れない。

カメリア　それじゃ気をつけてね、ライド。

ライド　そっちも気をつけて。

お互い別の方向に歩き出す。
ライドが立ち止まり。

ライド　あ、そうだ（振り返り）おいっ。
カメリア　（振り返り）何？　ライド。
ライド　カメリア。
カメリア　カメリア？
ライド　そう、君の名前…考えたんだ、いいだろ？
カメリア　私の…名前…。
ライド　それじゃ、必ず生きろよ、カメリア（去る）。
カメリア　（顔が綻び）カメリア…。（大声で）あなたも必ず生きて！（去る）

二人の別れから数日後。
フクが現れ。

フク　ライドとカメリアが別れて数日後…。

鳥達が楽しそうに会話したり飛び回っている。そこへライドがやって来ると、鳥達は何処かに飛び立っていく。

ライド　まただ、獣の匂いがするのにどこにも姿が見えない。ああーくっそぉー腹減ったー、まさか俺はこのまま飢え死にするなんて事に…いやそんな事あるもんか、この俺に限ってそんな事あり得ない、誰よりも強いこのライド様がこんな所で…。

寝転ぶライド、それを覗き込むフク。

フク　ほ～う！

ライド　（驚く）うわっ、何だお前かっ。

フク　何だとは何だ、それにお前じゃなくて、ちゃんと名前で呼びなさい名前で。

ライド　名前？　なんだっけ？

フク　わしの名前、忘れたのぉ？　悲しいなぁ、淋しいなぁ。

ライド　まさか、みんなは忘れてないよね？

フク　誰と話してんだよ。

ライド　じゃあ、せーので皆、わしの名前を呼んでくれるかなぁ？

フク　ボケたな、じじい。

ライド　それじゃ皆、恥ずかしがらずにいくぞぉ。わしの名前はフクロウの、せーのっ！

客席から「フクちゃん」
＊聞えなかったら二回目は舞台袖からも。

フク　思い出したかライド。

ライド　フクちゃんね、ところで俺に何か用か？

フク　じろーり（ライドを凝視する）。

ライド　何だよ。

フク　ガリガリじゃのう、食っとらんのか？

ライド　けっ、ほっとけっ。

フク　思う様に狩りができとらんのか？

ライド　たまたまさ、今はたまたまタイミングが合わないだけさ。

フク　そうかのう。ライドよ、お前さんは光る葉っぱを知っとるか？

ライド　光る葉っぱ？　そんなもん知らねぇな。そもそも俺は肉食だ、葉っぱなんかに興味はねぇ。

フク　そうか…。しかし現在（いま）、見る者によっては目が眩むほどに、その葉っぱは光を放ち、時には喉から手が出るほど欲しくてたまらないらしい。そしてその葉っぱ、いわゆる「光葉（こうよう）」が現在（いま）、猛威をふるっているらしい。

ライド　こうよう？　そう言えば以前俺が鹿を襲った時、そいつはその葉っぱがあれば、これからは思いのままに生きられるとか何とか言ってたような…。

フク　思いのままにねぇ…。

鳥達の囀り。

フク　よし、ちょっとあ奴らの囀りに意識をそばだててみようかのう。ほれっライド、そこの物陰に身を潜めるんじゃ。

ライド　何で俺様が隠れなきゃいけないんだよ。

フク　いいからいいから、ほれっこれも現在（いま）を生き抜くための大事な処世術なんじゃから…。

フクとライドは身を潜める。

そこへ鳥達がやって来て辺りを見回す。

タン　よし、もう誰もいないみたいね。

トン　うん、もう誰もいないね。

タン　（呼びに行く）さあ、今なら大丈夫よ！

トン　（呼びに行く）うん、今なら大丈夫！

そこへ一頭の草食動物がやって来る。

草食⑪　サンキューサンキュー、お前達のお蔭で安心して水場に行けるよ（光葉を鳥達に渡す）。ほら、これからもよろしく頼むぜ。

草食⑪は奥の水場に行く。

ライド　よし、今ならあいつ俺に気づいてないぞ。

フク　ちょっと待て、もう少し様子を見るんじゃ。

そこへハイエナ二頭がやって来る。

クロ　おい、本当にあんな奴ら信じていいのか？

ブチ　ああ大丈夫だ、俺に任せとけ。（懐から光葉を出して）こいつさえあれば、心配ないさぁ～！

クロ　おいっ、うるさいなっ、急になんだよ！

ブチ　あごめんごめん、つい興奮しちゃって。

タン　来たわね。

トン　来たわね。

ブチ　おお、お前達、どうなんだ？

タン　ちゃんと奥にいるわよ。

トン　今が絶好のチャンスだよ。

ブチ　そうかそうか、ありがとよぉ（光葉をタンに渡す）ほらよ。

タン　はいどうも。

トンも手を出し、光葉を待っている。

ブチ　（クロに）ほらっお前も光葉渡せよ。

クロ　ああそうだった（トンに光葉を渡す）はいどうぞ。

トン　はいどうも。

タンとトンは光葉を手に上機嫌。

ブチとクロはよだれを垂らし奥の水飲み場へ行く。

ライド　…どういう事だフク？

フク　見ての通りじゃよ…。

タン　（光葉を掲げて）ほら見て見て。

トン　うわー、すごいじゃーん！　こっちも見て見て（光葉を掲げて）ほらほらー。

タン　うわー、すごいすごーい！

タン・トン　すごいじゃなーい、すごいでしょーう。すごいじゃな

ーい、すごいでしょーう。うふふふふ…。

タンとトンは喜び踊っている。

そこへブチとクロが草食⑪を引きずって

現れる。

ブチ　おいお前達、ありがとよっ。

クロ　また頼むぜー。

タン　ええ、いつでもどうぞ。

トン　その時は、光葉も忘れずに。

ブチとクロは満足そうに去って行く。

ライド　おいフク、見たかあれ…。

フク　ああ見たよ、これが現実じゃ。

ライド　俺は死に物狂いで生きてるのに…（胸を押さえて）何だか分かんねぇけど、ここもスカスカ気分だぜ。

フク　ライドよ、あの光葉はもはやただの葉っぱではないようじゃのう。奴らの囀りも、すべて鵜呑みにするのは考えもんじゃのぉ。

そこへ他の鳥達がやって来て。

ピー　うわーあなた達、そんなに沢山の光葉どうしたの？
チク　うわー、そんなに沢山どうしたの？
タン　え？　それはちょっとねぇ。
トン　それはちょっとねぇ。
パー　ちょっとってなーに？
テク　ちょっとってなーに？
タン・トン　それは、ヒ・ミ・ツ。わぁーい。

タンとトンは飛び去って行く。

テク　わたしも光葉ほしなぁ～。
パー　わたしも光葉ほしいぃ～。
チク　そうだ！　ねぇエルーク様にお願いしましょう。
ピー　そうね、エルーク様にお願いしましょう。
テク　あっ、そう言えば知ってる？
パー　うん知ってる…、なにがぁ？
チク　知らんのかーい！
ピー　うける（W）
テク　行方知らずらしいわよ。
パー　行方知らず？
チク　誰が誰が？

ピー　あたしなら此処にいるけど…。
テク　この辺りじゃ有名だったライオンのボスが。
パー　ライオンのボスが？
チク　百獣の王なのにぃ？
ピー　ええー何でまた。
テク　そこまでは知らないけど。
皆　知らんのかいっ！
ピー　それ誰が言ってたの？
テク　え？　みんな。
パー　みんなって、どこのみんな？
テク　みんなは、みんなでしょうよ。

鳥達があーだこーだ言い合っている。
そこへライドが勢いよく飛び出す。

ライド　おいっ、誰なんだそれっ！

鳥達は驚いて逃げ去る。

ライド　おいっ、だからそのライオンって誰なんだよお…。
フク　ライド、急に飛び出してどうしたんじゃ？
ライド　ライオンのボスが行方知らずって…まさか俺のおやじ

が。百獣の王だぞ、親父に限って行方不明なんてあるわけない。

フク　あいつらの囀りすべてを鵜呑みにするな、必要な事だけ知っておけばいい。これからは何が必要な囀りで、何が必要でない囀りかを見極める事も大事じゃ。それを見誤ると自分自身があいつらに食われてしまうぞ。

ライド　…なあフクロウのじじい。

フク　フクちゃんじゃ。

ライド　さっきあいつらが話してた、エルークって奴を知ってるか？

フク　うん、会った事はないが聞いた事はある。向こうの森一帯を縄張りにしている、体長はお前さんよりも遥かに大きいヘラジカじゃ。中にはそのエルークの事を森の王様と呼ぶものもおるそうじゃ。

ライド　森の王様？　鹿ごときが？

フク　それで、その森の中にある一本の樹に光葉が生（な）るらしい。

ライド　葉っぱの事はどうだっていい、俺はそのエルークって奴をこの目で見たくなった。森の王だか何だか知らねぇが、俺がそいつを食ってやる、そして本当の王様は

この俺だと知らしめてやるよ。なんせ俺様は、誰よりも強い百獣の王なんだからな！

ライドは意気揚々と森へ向かう。

フク　（少し心配な面持ちで）森へ行くなら用心しろよ！なんせあそこはエルークの縄張りなんじゃからなっ。

暗転。

景4

動物達が皆で歌う歌が聞こえてくる。

森の中。

一本の巨樹の周りに動物達が集っている。

そこへライドがやって来るが、物陰に身を潜め様子を伺っている。

ライド　（息を切らし）ここが噂の森だな、いるいる獲物がわんさか居やがる…ん？　どういう事だ、草食の奴らだけじゃない…。

草食⑨　（少し遅れ）なあ、さすが皆集まるのがはやいよねぇ。

草食⑩　あんたがもたもたしてるからでしょう。

草食⑨　そう言いなさんなって、ちゃんと間に合ったんだからいいでしょう。

草食⑩　間に合うなんて当たり前でしょうが！　もしもエルーク様に会えなかったら死んだ方がましだよ。

草食⑨　あたしゃ死ぬのは嫌だ。

草食⑩　もしもだよ、もしも。そりゃあたしだって死ぬのはゴメンだよ。

草食⑨　だよねぇ。

草食⑩　でも、もしも今後あんたのせいでエルーク様に会えなかったりしたら、光葉を使ってあんたをあの肉食の奴らに襲ってもらうからね。

草食⑨　えーっ‼

ブチ　…何か言ったか？

草食⑨　あ、いやいや何も（小声で）ぁぁぉっかねぇ。バカ今目が合って一瞬、心の臓が止まったじゃないかよぉ。

草食⑩　（笑って）大丈夫だよ、この森ではいくら目が合ったとしても争いごとは禁止なんだから。

草食⑨　まぁそりゃそうだけどよぉ…。

鹿①　いやぁそれにしてもよ俺達、先代の長と知り合いで良

かったよなあ。

鹿②　ほんとそうだな、まさか長が亡くなって坊ちゃんがこの森を治める事になるとはなあ。

鹿①　おい今はもう坊ちゃんじゃなくて、エルーク様って言えよ。いくら先代の長と知り合いだったとは言え、あまりエルーク様に馴れ馴れしくすると他の奴が黙ってないからな。

鹿②　おおそうだな。でもよ俺らが坊ちゃんと、いやいや、エルーク様と一番近しい仲なんだから、せめてこの集まりには一番最初に来ようぜ。

鹿①　おうそうだな、そうしよう。

鹿②　ここに一番最初に来て、俺達が誰よりもエルーク様の事を想っているんだって証明してやろうぜ。

鹿①　うんそりゃいい。よし次からはこの森に集う時は誰よりも早く集まろう！

鹿②　よし、それじゃ決まりだな。

ミハエル　（樹にもたれたまま）おいっ。

鹿①②が振り向く。

ミハエル　おい、お前さん達だよ。

鹿②　（少し怯えて）ん、何だい？

鹿①　ここじゃ、争い事はタブーだぜ、分かってんのかい？

ミハエル　んな事は言われなくても分かってら。それよりあんたら、さっき誰よりもエルーク様の事を想ってるって言ってたよな？

鹿②　ああ、言ったよ。

鹿①　それよりあんた大丈夫か、だいぶ草臥れてるみたいだけど…。

ミハエル　（ゆっくり立ち上がり）いいか、よく聞けよ。まずエルーク様の事を誰よりも想っているのはこの俺だからな。

鹿①②は戸惑い、顔を見合わせる。

ミハエル　その証拠に俺はなぁ、七日前から此処に来てエルーク様の事をずっと考えてるんだ。

鹿①　七日前から此処に？　餌は食ってんのか…。

ミハエル　さっきあんたらは一番最初に此処に来るって言ってたけどよ、その覚悟はあんのか？

鹿②　覚悟はあんのかって言われてもなぁ…、それよりあんた本当に大丈夫か？

ミハエル　もしあんたらが七日前から此処に来るなら、俺は八日前に来るし、それより前に来るなら俺はもっと前に来るぞ。俺がオオカミだからって嘘じゃないからなあ・・・。

鹿①　お、おん…、これは何の話だ？

ミハエル　いいか、誰よりもエルーク様の事を考えて想っているのは、この俺なんだっ！（よろけて倒れる）

鹿②　おいおい、あんたちゃんと餌食ってんのか？　骨川筋衛門じゃねぇかぁ？

鹿①②はミハエルを端に座らせる。

ライド　なんだあのオオカミ、ふらふらじゃねぇか。あんなに腹減らしてるのに何で目の前の奴らを襲わねぇんだ？

ミハエル　すまねぇなあ。

鹿②　ああ、いいってことよ。

鹿①　ゆっくり座ってろよ。

ミハエル　兎に角だ、エルーク様は俺のすべてなんだ。エルーク様が喜んでくれるなら俺はそれで満足なんだ…それ以外は何もいらない、他には…何もいらない…。

ミハエルはまたぐったりする。

草食④　まずは自分の健康だろうに、あいつやばいなぁ。
草食⑤　うんそうだねぇ、ああ言うのは気をつけた方がいいよ。
草食⑥　そうだそうだ、あまり近づかない方がいいね。だっていきなり飛び掛かって来るかもしれないし。
草食⑦　いやぁ～、それは勘弁してほしいねぇ。
草食④　それにしても、あいつあの調子じゃもう長くないんじゃないか。
草食⑤　確かに、あれはもう時間の問題だね。
草食⑥　そもそもあいつは何がしたいんだろうね。
草食⑦　さぁよく分からん（指を頭に指して）栄養が足りてねぇんだよ。

鳥達が囀っている。

ピー　本人が幸せならそれでいいんじゃない。
チク　本人が幸せならそれでいいんじゃない。
タン　本人が幸せならそれでいいんじゃない。
パー　ああ羨ましいなぁ。
テク　ああ羨ましいなぁ。
トン　ああ羨ましいなぁ。
ピー　私達も幸せになるために。

チク　私達も幸せになるために。

パー　私達も安心した生活のために。

テク　私達も安心した生活のために。

タン　たーっくさん光葉を集めましょっ。

トン　たーっくさん光葉を集めましょっ。

鳥達の笑い声。

ライド　ほんとあいつらは何時でも何処でもよく囀りやがる、耳障りったらねぇや。…よし、そろそろ餌を狩るとでもするかぁ。

ライドは場所を移る。

草食⑦　ああ～、エルーク様はまだかなぁ、早く会いたいなぁ（母ライオンに）あんたも早くあいたいよなぁ。

母　…（沢山の葉っぱを手にして拝んでる）。

草食⑥　（草食⑦に）おいおい、いくらこの森がエルーク様の縄張りだからって、誰でも彼でもやたらと話しかけるなよ。

草食⑧　どうしたどうした、何か揉め事か？　此処で争い事を起こすと追い出されるよ。

草食⑥　いやそうじゃなくて、こいつが何も考えずに肉食の奴に声掛けるから、油断しすぎると危ないよって忠告してあげたのさ。

草食⑧　なんだそう言う事か、大げさだなぁ。

草食④　大げさって事もないだろうよ。

草食⑧　心配しすぎだよ、万が一何かあっても（光葉を見せながら）これさえあればすべて解決さっ。

草食④　おお、それもそうだなぁ。

草食達は光葉を前に笑い合う。

ブチ　（手に持った角を向けて）おいお前ら静かにしろっ！エルーク様がお見えになる。

草食④　分かったよ分かったから、そのおっかないのを下げてくれよ、血の気が多いなぁもぉ。

鹿①　待ってました！

鹿②　待ってました！

タン　いよいよだわ。

トン　いよいよね。

ブチ　おい騒ぐなって言ってんだろ！

クロ　静かにしろっ！

皆が「エルーク様」など徐々に興奮が高まる。
ブチとクロはそれを鎮めようとする。
そこへ奥からエルークが現れる。
ライドもすかさず騒ぎに紛れ込む。
エルークが定位置に着くと皆は注目する。
息を呑む、一同。

エルーク　奇跡の星地球、ここに生きるすべての皆さんこんにちは。

皆は盛大に盛り上がる。
エルークは歓声に答え手を挙げる。
そして手を下すとまた静まる。

エルーク　私はこの森一帯を治める一介の鹿、名はエルークと言います。

鹿①　知ってるよ！

鹿②　よっ森の王！

クロ　おいお前ら、勝手に喋るなっ。

エルーク　私は先代の長の後を継ぎ、こうして皆さんに語り掛ける事ができる。この幸福にまず感謝を言いたい。

皆さん、幸福とは…幸せとは一体なんなのか？
私たち動物は一人では生きていけない。しかし種の違う生き物、自然の摂理、そんな様々な事からすべてを受け入れ笑ってばかりではいられないのも知っている。
…私がまだ幼かった頃、両親を亡くした。

周りから溜息や落胆の声が漏れる。

エルーク　この世の中は弱肉強食、弱い者が淘汰され、強い者が生き残る。
しかし私の親は、本当に弱かったのだろうか？

「弱くない」などの声。

エルーク　そもそも本物の強さとは何なんだろうか？
私は悠久の宇宙（そら）に問いかけ、そしてこの厳しい現状を、幾日も必死に生き抜いて考えた。そしてこの豊かな自然から学び得た事は…「強さとは、身体能力ではなく、不屈の精神から生まれるものなのだ」と…。

周りから感嘆の声があがる。

エルーク　その時私は思った、この選ばれた特別な土地には光葉

樹があるじゃないか。そしてこの樹に成る葉っぱ、そう光葉を上手に活用し、皆で幸せになろうじゃないか！

ブチ　そうだー！　光葉がすべてだ！

クロ　光葉がすべてだ！

皆で「光葉がすべてだ！」。

エルーク　光葉があれば安心して水が飲める。

草食動物達はエルークの言葉を唱和する。

エルーク　光葉があれば確実に餌にありつける。

肉食動物達はエルークの言葉を唱和する。

エルーク　光葉があればどんな事も知る事ができる。

鳥達はエルークの言葉を唱和する。

エルーク　光葉があれば誰もが幸せに暮らす事ができる。

皆でエルークの言葉を唱和する。

エルーク　私はこの光葉を使って、誰もが生きやすい世の中にし

ていくつもりだ。その為にはもちろん、私一人の力では及ばない、此処に居る皆の協力が必要不可欠なのです。私に手を貸してくれるか？　私に力を貸してくれるか？　共に築こう理想の社会を、新しい世の中を‼

皆で盛大に盛り上がる。

鹿①　よーし、新しい世の中だー。

ブチ　俺はエルーク様の右腕になるぞ！

クロ　それじゃあ俺はエルーク様の左腕になるぞ！

鳥達　私達はエルーク様の目となり耳となる！

ミハエル　エルーク様、エルーク様、バンザーイ！　エルーク様バンザーイ…。

ミハエルはその場に倒れて力尽きる。

それを見た鳥達が騒ぐ。

ピー　ねぇねぇ見て見て。

チク　ねぇねぇ見て見て。

パー　なになにどうしたの？

テク　なになにどうしたの？

タンとトンはミハエルをよく見てから。

タン・トン　死んでる〜！

鳥達パニックで踊りだす。

ブチ　逝っちまったか（クロに）おい。

クロ　あいよ。

ブチとクロがミハエルを運び出す。

ライド　馬鹿かあいつ、飢え死にしやがった…。

母がブチとクロに葉っぱを見せながら話かける。

ブチ　何だあんた？　こいつを譲ってくれって言ってんのか？

クロ　ダメダメ、この肉はもう上流階級の所に持って行くって決まってるんだ。

母　（ありったけの葉っぱを出し）これを全部やるからいいだろう？

ブチとクロは顔を見合わせて笑う。

クロ　ライオンのおばさん、何だいその葉っぱは？

母　光葉だよ光葉、これがあればいいんだろ、これが…（葉っぱを押し付け）ほらっほらっ。

ブチ　（母を押しのけ）おいっあんた、いい加減にしろよっ！

母は倒れ、皆が注目する。

ブチ　あんたが手にしてるのは光葉でも何でもねぇ、どこにでも落ちてるただの葉っぱじゃねぇかっ！

クロ　俺ら肉食でも、光葉の本物と偽物の違いくらい分かるぜ、馬鹿にすんなよ。

ブチとクロは笑いながら運ぶ。

ライドが母に気づく。

ライド　母さん？　ねぇ母さんだよね？

母　…。

ライド　俺だよ、ライドだよ。

母　ライド？

ライド　そうライドだよ、ほら母さんが付けてくれた名前だよ。

母　ああ、ライドかい。久しぶりだね、元気にしてたかい？

ライド　ああ元気だよ…（腹を押さえ）なんとか。母さんは元気にしてた？　こんな所で何してるの？　ねぇ親父は、親父は何してるの？　今どこに居るの？　ねぇ母さん？　ねぇ母さん俺の話聞いてる？

母　ほら見てごらんライド（葉っぱを拾って）私もこんなに沢山手に入れたんだよ、凄いだろ？

ライド　…母さん（母の手を取り）そんな事より、ちゃんと食べてんの？　ガリガリじゃないか？

母　（ライドの手を払いのけ）あんた今のエルーク様の話を聞いてなかったのかいっ？（落ちた葉っぱを必死に拾い集めながら）これがあれば幸せに暮らしていけるんだよ、馬鹿だねぇあんたは。昔からあんたは母さんの言う事を聞かない子だったからねっ！

ライド　母さん何言ってんだよ、そんな物じゃ腹は膨れないだろっ。さあ今すぐこいつらを食っちまおうぜ、なっ。

母　さっきから五月蠅いねっあんたは、あんた一体誰なんだい、気安く触んないでよっ！（ライドを突き飛ばす）

ライド　痛っ…母さん…。

母　（力の限り）エルーク様、バンザーイ、バンザーイ。エルーク様、バンザーイ、バンザーイ。

ライド　ちっきしょう、母さんまで…母さんまでこんな（葉っぱを手に取り）あいつの、あいつのせいで…、おいっお前！

皆がライドを見る。

ライド　お前だよエルーク！

ざわつく皆。

ライド　母さんを、俺の母さんをこんなにしやがって。貴様、覚悟しろよ！

エルーク　はっはっは、少し興奮しすぎたみたいだね。

鹿①　本当だぜ、あまりにも嬉しいからってお前（ライドに近づく）。

ライド　うるせー俺に触るなっ！（突き飛ばす）食われてぇーのか？

鹿①　（尻もちを着く）痛ててっ。

鹿②　おい大丈夫かよ？

エルーク　穏やかじゃないねぇ。

ライド　何が理想の世の中だ、ふざけるな！

エルーク　ふざける？　私が？

ライド　そうだ、お前も此処に居るやつ皆もだ！

草食④　あいつ危ないなぁ。

草食⑤　うん危ねえ、ああ言うのは気をつけた方がいいね。

エルーク　私は正気さ、それに此処に居る皆もそれを知っている。

皆は頷く。

エルーク　その証拠にここでは狩りはもちろん、誰も争う者なんていない、平和そのものじゃないか？

ライド　平和？

エルーク　そう、今ここから安寧の地は広がっていくんだよ。その為に私は、この光葉をもっともっと広めていき、そしてこの世の誰もが平等に暮らしていける新しい社会を創るのさ。

皆は歓声をあげる。

ライド　平等？　新しい社会を創る？　俺の母親を狂わせる事が平和なのかよ？

エルーク　…私はあなたを狂わせたのかい？

母　エルーク様、私は幸せですよ。あんな世間知らずの言う事なんてシカトしておけばいいんですよ。

エルークは母に光葉をあげる。

ライド　母さん…。

エルーク　どうやら君は置いて行かれたようだね、時の流れに。

ライド　…目の前で死ぬ奴がいるのに平和なのかよ！

エルーク　命ある者は誰だっていずれ死ぬ、さっきのオオカミはそれが今だったという事、ただの自然死さ。大丈夫、彼の死は無駄にはしない、腹を減らした誰かの光葉と交換して新たな命に生まれ変わるから。

ブチ　俺、交換してもらおうかな？

クロ　ダメだよ。

ブチ　光葉ならあるぜ。

クロ　ダメだってさっき言ったろう。

ブチ　冗談だよ冗談。

エルーク　どうかな、この光葉があれば誰も争う事なく生きていけるんだよ。

ライド　そんなの嘘だ！　俺はそんな葉っぱには惑わされないぞ。

エルーク　君は頑固だね。

鳥達　頑固頑固、頑固頑固、父親譲りの頑固者。

頑固頑固、頑固頑固、父親譲りの頑固者。

エルーク　…ん？　思い出したぞその顔。私がまだ子供の頃、一組のライオンの親子に襲われ食われかけた事がある。しかしそのライオンの父と子が、プライドを巡って言い争っていたので、幼い私はその隙をついて運よく逃げ延びたんだ。

ライド　（はっとして）まさかお前、あの時の…。

エルーク　間違いない…あの時から君達親子はプライドは高く腕力にものを言わせてきた。それゆえに君の父親は、君の様にこの光葉を受け入れられず、あげく世間から自らの姿を眩ましたんだ。

ライド　あの親父が自ら姿を眩ますなんて嘘だ、ありえない…。

エルーク　それを信じるも信じないも君しだい。そして何の因果か、私の父親は君の父親に食べられてしまった、私の目の前で…。

鹿①　長が⁉　なんてこった…。

鹿②　そりゃあエルーク様も辛かっただろうなぁ。

クロ　お前の親父がエルーク様の親父さんを食ったのか？

ブチ　太ってぇ野郎だ。

お前はちゃんと食う相手を選べよ。間違えてもエルー

ク様を食おうなんて考えるんじゃねぇぞ！

ライド　何だよそれ…そいつは特別で、俺の親はどうなっても構わないって言うのかよっ。

ブチ　そりゃそうだろうよ、現在（いま）はエルーク様あっての平和、エルーク様あっての光葉だからな。

クロ　エルーク様とお前の親は、命の重さが違うんだよ、命の重さが。

母は笑いながら泣いている。

ライド　ふざけんなっ！　情けない奴らだなお前らは。肉食のくせに、そんな葉っぱに目が眩んでヘコヘコしやがってよ。俺が教えてやる、誰が本当に強いのか、そして百獣の王が誰かって事を！

皆は警戒する。

エルークは光葉を皆に撒く。

ブチ　此処での狩りはご法度だぜ（牽制する）。

ライドは皆に囲まれる。

ライド　どうするって言うんだ？

クロ　お前を駆逐する、死にたくなければ此処から去れ。

ライド　光葉、光葉って。そんな葉っぱに支配されてよぉ、みっともねぇったらねえや。

エルーク　彼らの言う通りにした方が身のためだ。此処では狩りはもちろん争い事は許されない、君独りではどうにもできない。

ライドはジリジリと端へ追いやられる。

その時ライドの視界にカメリアが映る。

ライド　へへ俺は独りじゃないんだよ。

ブチ　独りじゃない？　何言ってんだお前。

クロ　追い詰められて、おかしくなっちまったのか？

ライド　よーし、カメリア今だっ、やれっ！

皆がライドの視線の先に顔を向けると、そこにカメリアが現れる。

そしてエルークの元へ駆け寄る。

ライド　よし、ざまぁみろっ！

皆は「ステイト様」と声をあげる。

エルークは落ち着いて向かい入れる。

ライド　え？

エルーク　ステイト遅かったなあ。

ステイト　遅くなってごめんなさい、エルーク。

ライド　どう言う事だ？

エルーク　皆の中には既に知っている者もいるかもしれないが、改めて紹介しよう。彼女は私の理想の未来の良き理解者で、心強い味方のステイトだ。

ライド　味方のステイト…？

皆は歓迎の声をあげる。

草食④　おお、あれがステイト様か。

草食⑤　噂には聞いていたけど、ここで御目にかかれるなんて今日はついてるねえ。

草食⑥　ああ、なんだかこうしてエルーク様とステイト様が並んでいるのを見ると、感慨深いものがあるねぇ。

草食⑦　うん、これから新しい未来がやって来るに違いない。

ステイトは皆に光葉を配る。

皆はステイトに群がる。

エルーク　さあ皆、あとは頼んだよ（クロとブチに目配せする）。

クロとブチを筆頭に皆でライドを牽制する。

ライド　カメリア、どう言う事だ、カメリア！

ステイト　…。

ライドへの圧は強まる。

ライド　何がステイトだ、くそっ！（堪らずその場を去る）

クロとブチは後を追う。

皆もそれに続く。

エルークとステイトだけが残る。

エルーク　ステイト、あのライオンは顔見知りか？

ステイト　まあ、そりゃあ同じ種族だもの…。

エルーク　カメリアと言うのは君の名前なのか？

ステイト　前の名前よ。今の名前はステイト、そうでしょエルーク。

エルーク　うん、そうだな…。君は後悔してないのか？

ステイト　後悔？

エルーク　まったく種も違う私と、生活を共にする事を。
ステイト　（ゆっくりと光葉を拾いながら）生きる為だもの。
エルーク　生きる為か…生きる為なら手段を選ばない。自分が選んだ道を信じぬく事も、また一つの幸せの在り方なのかもしれないなぁ…（去る）。

ステイトはお腹をおさえる。

ステイト　生きる為だもの、私達が生き抜くためだもの…。

ステイトは光葉樹を見上げる。
輝く光葉樹。
ステイトは吐き気を催し嘔吐する。
暗転…と思いきや明転。
そこへライドが走り込んで来る。

ライド　何ぼーっと突っ立ってんだよっ。
カメリア　⁉　ライド！
ライド　さあ行くぞ、カメリア。
カメリア　え、行く？　行くって何処に？
ライド　そんなの決まってんだろう！

ライドはカメリアの手を取り
二匹のライオンは走り去って行く。

終章

ゲンチャンと子供達。

子供　ねぇねぇおじさん、あの雌ライオンの名前はどっちなの？

子供　ねぇねぇおじさん、ライド達はどこに走って行ったの？

子供　ねぇねぇおじさん、光葉ってただの葉っぱじゃないの？

子供　ねぇねぇおじさん、この物語ってこれで終わりなの？

「え～うっそ～、やだ～、続きが見たい」
など子供達が思い思いの言葉を口にする。

ゲンチャン　みんな、ほら聞いておくれ。
ライドやカメリアがあれからどう生きたのか？
あの葉っぱは、何故あんなに光って皆を惑わすのか？

いいかい皆、この物語の続きはねぇ、これから皆が創っていくんだよ。

子供達は「えー何それ、変なの～」など不思議そうにする。

ゲンチャン　君達なら、まだどんな物語も創る事ができる。君達には、この先の物語を創るための時間も、権利も、そして可能性も、たーくさっんあるからね。そしてもう一つ。生きて行く中で、「肝心な事は目には見えにくいもの」なんだ…。

子供達は思い思いの返事をする。

ゲンチャン　よし、それじゃ皆で歌を歌いながら、この物語の続きを考えるとしよう。

皆で歌う。

動物達も全員舞台上に集まり一緒に歌う。

―幕―